人間にならなかった
妖怪

目次

一つ目 1
カラ傘小僧 3
いじめ 5
陰口 10
セクハラ 13
表と裏の顔 17
あずき洗い 21

一つ目

　僕は左手に持った教科書をチラチラと見ながら学校の敷地内にある池の水面に映る自分の顔を眺めていた。
　左手に持つ教科書には人間の顔写真や全身写真、人間界の風景写真などが載っている。その写真に映る人間の顔は綺麗な二つの目を持っていて、高い鼻が顔の真ん中にあり、口は小さくてキリッとしている。そして頭にはフサフサの髪の毛が載っている。
　それに引き換え、僕の目は大きいけど顔の真ん中に一つあるだけ。鼻はないし口は横にやたら大きい。頭は髪の毛がなくツルツルだ。教科書に載る人間の顔と池の水面に映る自分の顔を見比べるとため息が出る。
「人間ってかっこいいな。それに比べて、なんで僕の顔はこんなに酷いんだ。人間が羨ましい」
　僕は教科書に載っている人間の写真を眺めながらそう呟いた。
　教科書の写真に見とれていると、頭のてっぺんに冷たいものがポツポツと当たる感触があった。水面を見ると自分の顔の上で丸い水紋が次から次へ生まれては消えている。
　慌てて教科書をとじてカバンに入れた。空を見上げた途端に強い風がビューッと吹いて、雨粒は急に大きくなり勢いを増した。池に映っていた僕の顔はぐしゃぐしゃになっている。僕はカバンを胸に抱え校舎へと避難した。
　僕は妖怪学校で『人間の心得』を学んで、すごく感動した。人間は見た目がかっこいいだけでなく、心も凄く綺麗な生き物だと知った。
　僕はもっと『人間の心得』を学んで、学校を卒業したら資格を取って人間になりたいと思っている。そして人間界で幸せに満ちた生活を送るつもりだ。
　僕に『人間の心得』を教えてくれているのは、あずき洗いという先生だ。先生は『人間の心得』を僕たちに教えてくれるが、先生自身は人間にはなりたくないらしい。
　先生に何故人間になりたくないのかと訊いたことがある。その時の先生の答えは、こうだった。
「『人間の心得』を学ぶことは、非常に素晴らしいことですが、人間になって人間界で暮らすことはあまり素晴らしいと私は思わない。『人間の心得』だけを身に付け、妖怪として生きるのが一番幸せです」
　僕はあずき洗い先生の言っている意味がよく理解できなかった。せっかく『人間の心得』を学んだのに、人間にならないなんて、それなら学ぶ意味がないじゃないかと思った。

　僕は絶対に『人間の心得』をマスターして、人間になって幸せに暮らすつもりだ。

『人間界の心得』

・相手へのおもいやりの心を持つ。こんな風にすれば相手が喜ぶだろう、助かるだろうと考え、自ら積極的に実践する。

・ありがとうの一言が周りを明るくする。そしておかげさまの一言が自分を明るくする。

・謙虚な人ほど感動する。感動するから学びがある。

・相手を傷つける言葉を使わない。相手が気持ちよくなる言葉で話す。

・どんな時も感謝の気持ちを持つ。周囲に対して感謝できない人間は成功し続けることはできない。

カラ傘小僧

　ある日、僕は友達のカラ傘小僧といっしょに街に出た。カラ傘小僧は『人間界の心得』は堅苦しくて苦手だと言っていた。だから人間になることには興味が無いみたいで、妖怪のまま気楽に暮らしたいそうだ。
「一つ目小僧よ、そんなに人間になりたいのか」
　カラ傘小僧が傘を半分だけ開いて、僕と同じ一つ目をパチパチしながら、不思議そうに訊いてきた。
「うん、僕は人間になって、幸せな生活を送りたいと思ってるんだ」
「人間てそんなに幸せなのかな。妖怪の方が自由で楽しく生きてるんじゃないか。将来の事だから慎重に考えた方が良いと思うぞ」
　傘をぎゅっと閉じたカラ傘小僧の表情は真剣だった。
「妖怪の世界は、妬みや醜い争いが多いから好きじゃないんだ。その点、人間は心が綺麗で優しいだろ。だから、人間界で暮らしたいんだ」
「人間界も妖怪の世界も、そんなに変わらないと思うけどな。教科書には、良いことしか書いてないから、それを鵜呑みにするのはどうかと思うぞ」
「カラ傘小僧は人間界に詳しいのかい」
「詳しくはないけど、たまに人間界を覗きに行ったりしてるんだ。その時見る人間はそんなに幸せそうに見えないけどな」
「えっ、カラ傘小僧は勝手に人間界に行ってるの。それダメだよ、先生に怒られるよ」
「そんな堅いこと言うなよ、俺以外にもみんな行ってるぞ」
「人間に見つかったらヤバイんじゃない。捕まったら焼かれたりするって聞いたよ」
「ハッハッハッ」
　カラ傘小僧は傘をバサバサとしながら、大声で笑った。
「お前は真面目すぎるよ。人間に見つかっても大丈夫だよ。捕まるどころか、人間は俺の姿をみると腰抜かして逃げて行くよ。のっぺらぼうなんかは休みの日になると人間界に行って、人間を脅かして楽しんでるぞ」
「のっぺらぼうは、そんな悪いことしてるんだ。真面目そうな顔してるのに」
「なんで、のっぺらぼうなのに真面目そうな顔なんだよ、意味わかんねえな。ハッハッハッ」
　カラ傘小僧は傘を一段と大きく開いて、笑いが止まらないようすだった。
「それにしても、カラ傘小僧ものっぺらぼうもすごいね。僕も一度、人間界を覗いてみたいな」
「それじゃあ、のっぺらぼうを誘って三人で人間界に行ってみようぜ」

「そんなことして大丈夫かな。先生に怒られないかな。捕まって焼かれたりしないかな」
　僕は人間界に行きたい気持ちはあるが不安な気持ちの方が大きかった。
「お前、何、ビビってんだよ」
　カラ傘小僧が自分の傘の先で僕の脇腹をツンツンとつついてきた。
「くすぐったいから、やめてくれよ」
　僕はカラ傘小僧の傘の先を払った。
「へへへ、とりあえずのっぺらぼうを誘うからさ、三人で人間界に行こうぜ」
「えっ、ほんとに行くの。僕は不安だな」
「大丈夫だって。人間界はおもしろいぞ。それに将来本当に人間界に行くつもりなら、絶対見ておいた方がいいぞ」
「そうだね、確かに一度見ておいた方がいいとは思ってる」
「よーし、善は急げだ。すぐにのっぺらぼうを呼びに行こうぜ」
「えっ、今から行くの」
「当たり前だ。楽しみだ」
　カラ傘小僧は傘を開いたり閉じたりして興奮していた。
　そんなわけで、僕は、カラ傘小僧と、のっぺらぼうとで、人間界に行くことになってしまった。

いじめ

「ここが人間界か。どこを見てもやっぱり綺麗だな」
　僕はカラ傘小僧とのっぺらぼうに連れてきてもらった人間界の田園風景を見て興奮した。田園の緑とそのバックに広がる山々の深い緑が太陽の光に輝いている。真っ青な空に白い雲がニョキニョキと沸き立つ。
　目の前に広がる風景は 教科書で見た写真と同じだ。
「別にたいしたことないだろ」
　カラ傘小僧が僕の頭の上に乗って言った。
「カラ傘小僧、重たいから頭から降りてくれよ」
「へへへ、そっか、ここからの方が見晴らし良いんだけどな。仕方ねえな、降りてやるよ。ヨイショ」
　カラ傘小僧は僕の頭からピョンと飛び降りた。
　カラ傘小僧が降りたちょうどその前を二人の人間が、僕たちに気付く様子もなく通り過ぎていった。
「婆さん、その荷物は重いからわしが持とうか」
「お爺さん、大丈夫ですよ。ありがとうね。お爺さんこそ腰の具合は大丈夫なんですか」
　二人の人間は僕たちの前を通りながらそう話していた。
　僕はその会話を聞いて人間はやっぱり凄い、『人間の心得』通りだと思った。
「人間には僕たちの姿は見えてないの」
　僕はカラ傘小僧に訊いてみた。
「ああ、見えてない。俺たちが念じない限りは人間は俺たちの姿は見えない。そうだよな、のっぺらぼう」
　今度は、のっぺらぼうが僕の頭に乗って胡座をかいている。
「そうだなあ、普通の人間はわしらの姿は見えとらんなあ。けど、たまーにわしらの姿が見える人間もおるけどもなあ」
「なんで、二人とも僕の頭に乗っかるんだよ。早く降りてよ」
　僕は頭の上に乗るのっぺらぼうを両手で持ち上げて、ゆっくりと地面に置いた。
「フゥー、重たかったー」
　僕は額から流れる汗を拭った。
　のっぺらぼうはそのまま地面で胡座をかいていた。
「それじゃあ、もっとたくさん人間のいる所へ行こうぜ。そこで人間を脅かしてやろうぜ」
　カラ傘小僧はピョンピョンと楽しそうにその場で跳ねながら言った。

「ダメだよ、そんなことして人間に捕まったらどうするんだよ」
　僕はカラ傘小僧を止めようと、カラ傘小僧の太い一本足を掴んだけれど、カラ傘小僧は傘をバサバサして、僕の手を振り払った。
「大丈夫、心配いらないぜ」
　カラ傘小僧はそう言ってピョンピョン跳ねたまま先へと行ってしまった。
「じゃあ、行こうかのお」
　のっぺらぼうも、カラ傘小僧の後をドシドシと音を立て走ってついて行った。
「待ってよ、僕も行くよー」
　僕は二人の後を追いかけた。
　すぐに、のっぺらぼうに追いついた。のっぺらぼうは立ち止まっていた。
「のっぺらぼう、カラ傘小僧はどうしたの」
　のっぺらぼうの隣に立って訊いた。
「そこにおるわ」
　のっぺらぼうが顎で差した。顎の先に視線を向けると、そこにカラ傘小僧の姿があった。
　カラ傘小僧は公園の前に立っていて公園の中を睨むようにじっと見ていた。
「カラ傘小僧、どうしたの」
　僕とのっぺらぼうは、カラ傘小僧の横まで行って訊いた。カラ傘小僧の目はいつもと違うきつい目をしている。
「あそこに人間がいる」
　カラ傘小僧の視線の先を見ると、三人の少年の姿があった。
「あっ、ほんとだ」
「あいつら揉めてる」
　カラ傘小僧が言うので、少年たちを見ると、確かに揉めている様子だった。
　カラ傘小僧が少年たちの方へピョンピョンと向かって行ったので、僕とのっぺらぼうもカラ傘小僧について行った。
　一人の少年がもう一人の少年に向かって大声で怒鳴っていた。
　怒鳴っているのは、背が高く細くてガイコツみたいな少年だった。怒鳴られているのは、少しぽっちゃりした子泣き爺みたいな少年だった。子泣き爺みたいな少年は体を小さくして怯えているように見えた。
「おい、デブ、お前太ってるからトロいんだよ。俺らの足ばっかり引っ張りやがって。お前のせいで今日の試合負けたじゃねぇか」
　子泣き爺のような少年は、ガイコツみたいな少年に怒鳴られて野球のバットで頭をこつかれていた。
「ごめんなさい」
　子泣き爺少年は頭をおさえ、体を一段と小さくした。
「謝ってもすまねえんだよ」
　ガイコツ少年はそう言って、子泣き爺少年の尻を力いっぱいにまわし蹴りした。
「ごめんなさい」
　子泣き爺少年は両手で尻をおさえた。

「謝ってもすまねえって言ってんだろ。何度も言わせんな、このウスノロがー」
　ガイコツ少年が、子泣き爺少年の耳元に顔を近づけて怒鳴った。
「どうしたら許してくれるの」
　子泣き爺少年が情けない声を出した。
「そうだな、俺の靴を舐めて綺麗にしろや。靴が綺麗になったら許してやる」
　ガイコツ少年は自分の右足を前に出した。
「これを舐めるの」
　子泣き爺少年がガイコツ少年の出した右足を見下ろし、指をさした。
「これってなんだ。俺の靴だぞ。山岡様の靴だ。山岡様の靴を舐めて綺麗にさせてくださいって言えや」
　ガイコツ少年の名前は山岡というようだ。
「わかったよ」
　子泣き爺少年が四つん這いになった。
「わかったよ、じゃねえだろ。山岡様、かしこまりましたじゃ。言いなおせ」
「や、山岡様、か、かしこまりました」
　子泣き爺少年の声が涙声になっていた。
「山岡様の靴を綺麗にさせてくださいと言え」
　ガイコツ少年が四つん這いになる子泣き爺少年の頭の上に足を置いておさえつけた。子泣き爺少年の額が地面についた。
「山岡様の靴を綺麗にさせてください」
　子泣き爺少年は地面に額をつけたまま言った。
「よーし、舐めさせてやる」
　四つん這いになった子泣き爺少年はガイコツ少年の靴を舐めはじめた。
「ゴホン、ゴホン、ウェー」
　舐めはじめてすぐに子泣き爺少年が咳をし嗚咽した。子泣き爺の口から漏れた唾液がガイコツ少年の靴に垂れた。
「てめえ、いいかげんにしろよ」
　ガイコツ少年は、子泣き爺少年の顔面を蹴り上げた。子泣き爺少年はそのまま後ろ向きに倒れた。
「ごめんなさい」
　子泣き爺少年はその場で土下座をした。
「俺を舐めてんのかー」
　ガイコツ少年は怒鳴った。
「『俺を舐めてんのか』って、てめえが靴舐めろって言ったじゃねえか」
　カラ傘小僧が僕の横で呟いた。
「よし、山岡、お前はもういい。後は俺にまかせろ」
　ずっとガイコツ少年の後ろで様子を眺めて立っていたもう一人の少年がポケットに手を突っ込んだままガイコツ少年の前に出た。
「はいっ」

ガイコツ少年はすっと直立不動になった。こっちの少年がリーダーのようだ。体は三人の中で一番小さいが、眼光がするどく狼男みたいな少年だ。
「おい、ウスノロ」
狼男少年はしゃがみこみ、土下座している子泣き爺少年の髪の毛を引っ張り顔を上げさせてから、耳元でそう言った。
「ごめんなさい」
「このグズがー」
狼男少年が子泣き爺に往復で平手打ちをした。次に子泣き爺少年の首根っこを掴み、立ち上がらせてから思いっきり腹を三発殴った。
「オゥエー」
子泣き爺少年は腹をおさえ前屈みになった。
狼男少年は前屈みになった子泣き爺少年の頭を掴み顔面に膝蹴りをした。そして、次に子泣き爺少年の髪の毛を掴み、顔面に往復ビンタを見舞った。
ビンタされて左右に首が揺れる子泣き爺少年の鼻からは赤いものがピシパシと飛んだ。
狼男少年が手を止めると、子泣き爺少年は鼻をおさえ下を向いた。赤いものがポタポタと地面に落ちた。
狼男少年は手を緩める気配はなく、また子泣き爺少年の胸ぐらをつかんで、顔を近づけ睨みながら右手にまた拳を作り振り上げた。
「ムゥームゥー」
僕の隣に立っていたのっぺらぼうが、急に変な声を出した。
次の瞬間、のっぺらぼうが子泣き爺少年の後ろに背後霊のように立って姿を現した。のっぺらぼうの顔面は真っ赤で、体の大きさがいつもの三倍くらいになっている。
のっぺらぼうは怒っている様子だが表情はわからない。ただ顔が真っ赤になっていたので、相当怒っているのだろう。
狼男少年は、子泣き爺少年の後ろに背後霊のように立つのっぺらぼうの姿を見て目を大きく見開いた。
子泣き爺少年の胸ぐらを掴んでいた手をほどき、そのまま腰を抜かすように後ろに倒れた。
「でっ、でたー、お、お、お化けだー」
狼男少年はのっぺらぼうに向かって人差し指を向けて、ガクガクと体を震わせていた。腰を抜かしたのか起き上がれないようすで、地面に腰をつけたままズルズルと後退りしていく。
「ヒ、ヒエー」
ガイコツ少年ものっぺらぼうの姿に驚いて悲鳴を上げて一人だけ逃げようとした。
逃げようとするガイコツ少年の前に今度はカラ傘小僧が姿を現した。カラ傘小僧は傘を大きく広げてグルグルと回し、ガイコツ少年の前につむじ風を起こした。
「ギャアー、た、た、たすけてぇー」
ガイコツ少年もその場でへたりこんでしまった。
「抵抗しない弱い者をいじめるお前らは最低じゃー。俺が食い殺してやる」
カラ傘小僧が口を大きくあけてガイコツ少年を大きな一つの目で睨みつけた。

「お前も食い殺してやるぞぉー」
　のっぺらぼうが狼男少年の鼻の先に真っ赤な顔面を近づけ大きく口を開けた。
「ウワーン、ウワーン、ごめんなさーい」
　二人の少年は大声で泣き出してしまった。
　子泣き爺少年は何が起こったのかわからない様子で、その場でキョトンと立ち尽くしていた。この少年にはのっぺらぼうとカラ傘小僧の姿が見えていないようだ。
「ギャー」
　二人の少年はやっと立ち上がり走って逃げて行った。
「ハッハッハッ」
「ヒッヒッヒッ」
「ヨッシャー、おもしれえなー」
　カラ傘小僧とのっぺらぼうは笑いながら、ハイタッチした。
「あのバカ野郎が。弱いものいじめしやがって。ほんと人間は下等な生き物だぜ」
　カラ傘小僧が逃げて行く二人の少年の背中を睨みつけた。
　僕はビックリして子泣き爺少年と同じように立ちつくしていた。カラ傘小僧が人間のことを下等な生き物と言ったのが気になった。
「ハァー、スッキリしたー」
　カラ傘小僧がそう言って僕の肩に手を置いた。
「二人共、すごく怖かったよ。君たちがあんなに怒った姿をはじめて見たよ」
　僕はカラ傘小僧とのっぺらぼうの顔を交互に見て言った。
「俺たち妖怪は外見がみんなバラバラで個性的じゃないか。俺は傘の形してるし、君は頭が丸いし、のっぺらぼうなんて、こんな顔だぜ」
　カラ傘小僧は目を閉じて無表情になって、のっぺらぼうの顔真似をしてから続けた。
「でも、そんな事でいじめたりしないだろ。けど、人間はちょっとだけみんなと違うというだけで仲間はずれにしたり、バカにしたりするんだ。本当に下等な生き物だ」
　カラ傘小僧は、傘をぎゅっと閉じて怒っている様子だった。また人間を下等な生き物と言った。のっぺらぼうは顔を真っ赤にして頭から湯気が上がっていた。僕は二人のいつもとは違う一面を見た気がした。
「じゃあ、次、行こうか」
　カラ傘小僧は気をとり直したようで、ピョンピョンと太い一本足で飛び跳ねながら走って行った。
　その後ろをのっぺらぼうがスキップしながらついて行く。僕も置いてけぼりにされないように走ってついていった。

陰口

　カラ傘小僧の背中を追いかけていくと、カラ傘小僧は、僕がこれまでに見たことないくらいものすごく高い建物の前で立ち止まった。
「これ、すごいだろ」
　カラ傘小僧が建物を見上げながら僕に言った。
「うん、すごく高いね」
　僕も建物を見上げた。
「ここにはバカな人間たちがたくさん住んどるんじゃ。建物は一流でも中にいる奴らは三流じゃ」
　のっぺらぼうも建物を見上げながら言った。
「へぇー、そうなんだ」
　のっぺらぼうが三流というのは人間のことを言ってるのだろうか。
「中に入ってみるか」
　カラ傘小僧がガラスの自動ドアをすり抜けて建物の中に入って行った。
　僕とのっぺらぼうも後に続いた。
　中に入ると焦げ茶色のドアが四つ並んでいた。
「これがエレベーターっていうんだ。人間はこの中に入って、この建物の上に上がるんだ」
「このドアの中に入ると、上に上がれるって凄いね」
　僕はそう言って、不思議なドアに手を触れてみた。するとドアに触れた瞬間に急にドアが開いた。ビックリしてドアから慌てて手を引いた。
「これに乗って上まで行ってみるか」
　カラ傘小僧がエレベーターに乗り込んだ。
「乗ってみるかな」
　のっぺらぼうも乗り込んだので、僕も乗り込んだ。こんなすごい乗り物まで人間は作っているんだとエレベーターの中を上下左右に視線を走らせた。思ったより狭い空間だけど、上に上がるだけならこれで充分だなと思った。
　エレベーターのドアが閉まりかけた時に二人の人間の女性が走って僕たちの乗ったエレベーターに乗り込んできた。
　乗り込んできた二人は「ハァー、ハァー」と息を切らしていた。
　女性の年齢はどちらも四十歳位だろうか。二人共、身長が高くてモデルのように美しかった。やっぱり人間は美しい。猫娘や砂かけばばあとはえらい違いだ。
　切れ長な目をした女性とクリクリと黒目の大きい女性の姿に僕は見惚れた。二人とも鼻は高くてすっとしていて、唇は赤くキラキラと輝いていた。

「何じろじろ見てんだよ。このスケベ野郎」
　カラ傘小僧に気づかれ後頭部をパシンと叩かれた。
「へへへ」
　僕は叩かれた後頭部を右手でさすりながら笑った。
「一五〇三号室の佐伯さんの息子だけどさあ、金泉中学に行くらしいわよ」
　切れ長目の女性が気だるそうな声で言った。
「えーっ、あのボンクラ息子が有名私立中学のお坊っちゃま学校に入学するわけ。あそこは勉強ができないと入れないはずよ」
　もう一人の女性がクリクリした大きな目を一段と大きくした。
　女性たちはエレベーターの中で二人っきりなのに、ヒソヒソ話をするようにお互い顔を近づけて話していた。
「あの息子、どう見ても勉強出来そうには見えないでしょ。だからお金の力じゃないの」
「あたしもそう思う。あの息子、あたしに会っても挨拶も出来ないからね。親のしつけがなってないわ」
「佐伯さんのところは奥さんも旦那さんも挨拶しないし、ゴミ出しのルールは守らない。その上に不正入学なんて、最低な家族ね」
「それからさー、水口さんとこだけどさー、あそこの家族も酷いわよ。この間、最悪でさー」
　切れ長目の女性が口元を歪めていた。
「えっ、何かあったの？」
　クリクリ黒目の女性が興味深そうに目を輝かせた。
「あのね」
　切れ長目の女性がクリクリ黒目の女性の耳元に口を近づけた。
「聞いてらんねえや」
　カラ傘小僧がそう言って、エレベーターの非常ボタンに手を伸ばした。
「何するつもり？」
　僕が訊くと、カラ傘小僧はニヤリと笑って、非常ボタンを押した。エレベーターはガクンと止まった。
「あら、何、急に止まったわよー」
　切れ長目の女性が悲鳴のような声をあげた。
「故障かしら」
　クリクリ黒目の女性がエレベーターの『開』のボタンを連打した。
「たすけてー」
　エレベーターの中に切れ長目の女性の声が響いた。
「妬むんじゃねえよ。陰口ばかり言うな。てめえらはバカか」
　カラ傘小僧がドスの効いた低い声を出した。
「今、なんか変な声しなかった？」
　切れ長な目の女性がクリクリ黒目の女性の二の腕を掴んだ。
「うん、聞こえたわ。どこから聞こえたのかしら」
　クリクリ黒目の女性はエレベーターの中に視線を走らせた。

　のっぺらぼうがエレベーターの照明を消した。
「キャー」
　エレベーターの中に悲鳴が響いた。
「他人の陰口ばっかり言う奴は許せねえー。お前たちを一生恨んでやるうー」
　のっぺらぼうが喚いた、
「誰か助けてー」
　二人の女性は悲鳴を上げ、人差し指で耳に栓をしてその場にしゃがみこんだ。
「行こうぜ」
　カラ傘小僧がエレベーターのドアをすり抜けて出て行った。
「おお」
　のっぺらぼうも続いて出て行った。
「ちょっと待ってよー」
　僕は二人の女性の怯えている様子を見て、そのままにしていいものか悩みながらも結局二人に続いて出て行った。
「ハッハッハッ」
「ヒッヒッヒッ」
　建物から出てきて、カラ傘小僧は楽しそうにピョンピョンと跳ねていた。のっぺらぼうの表情はわからないけど、笑い声が聞こえるし、スキップしてるから楽しいんだろう。
　二人を見ていると、僕までなんだか楽しくなってきた。いつも、この二人といると楽しいんだけど、今日は特に楽しい気がする。
　カラ傘小僧は、車のボンネットの上をピョンピョンと跳ねて道路を渡り、今度は向かいの建物に入っていった。

セクハラ

　カラ傘小僧が入っていった建物は全面ガラス張りの建物で、太陽の光が反射してピカピカと輝いていた。
　僕とのっぺらぼうは、横断歩道を渡って、カラ傘小僧に続いてピカピカの建物の中に入った。
　中に入ると、カラ傘小僧が建物に入ったところで立ち止まっていた。
「一つ目小僧、これがオフィスビルってやつだ。さっき入った建物がマンションといって人間が生活しているところで、このオフィスビルは人間が仕事するところだ。ここにも色んな人間がいて、なかなか面白いんだぞ」
　僕がカラ傘小僧の隣に立つと、カラ傘小僧がニヤニヤと笑いながら教えてくれた。
　僕たちのすぐ前にはまた二人の綺麗な女性が座っていた。さっきのエレベーターの女性よりも年齢は若そうだ。
　一人は髪の毛が短く目がクリッとしたリスのような可愛い女性だ。猫娘もこれくらい可愛ければ良いのにと思った。
　もう一人は背が高くて髪の毛が長い女性だった。肌の色がすごく白い。機嫌のいい時の雪女に少し似ているなと思った。
　二人はこの建物の受付嬢だと、カラ傘小僧が教えてくれた。
　彼女たちの話し声が聞こえてきた。
「さっきの客、最悪だったわね。ぶっさいくな顔してるくせに、食事に誘ってくるなんてあり得ない」
　雪女みたいな受付嬢が不機嫌そうに口元を歪めていた。
　僕は機嫌のいい時の雪女みたいに綺麗だった女性の顔が、砂かけババアの顔に変わったように見えた。不思議だなと思って女性の顔をもう一度まじまじと見た。今の顔はやっぱり砂かけババアにすごく似ていた。
「うちに来るのって、あんな奴ばっかりだね。もううんざりだわ」
　猫娘より可愛かったはずの女性の顔も、砂かけババアみたいになっていた。人間の顔ってこんなに変わるんだと不思議に思った。
　知らない間にのっぺらぼうが彼女たちの前に立っていた。
「見てろ、のっぺらぼうが何かやらかすぞ」
　カラ傘小僧が僕の耳元で囁いた。
「ギャー、お化けー」
　急に女性たちが悲鳴のような声を上げた。
　見ると、のっぱらぼうが彼女たちの前に大きな鏡を向けていた。彼女たちは鏡に映った自分たちの顔を見て驚いてるようすだ。

「ヒッヒッヒッ、鏡に映った自分たちの顔を見て、お化けだって驚いてるわ。今の自分たちの顔がお化けみたいになってることに気付かせてあげたぞおー」
「ハッハッハッ、さすが、のっぺらぼうだな。いつも笑わせてくれるぜ」
　カラ傘小僧が傘をパタパタと開いたり閉じたりして笑っていた。
　僕もついケラケラと笑ってしまった。
「次は上の階に行ってみようぜ」
　カラ傘小僧が階段をトントンと上がっていった。僕とのっぺらぼうはカラ傘小僧の背中を追いかけていった。
　三階まで上がったところで、カラ傘小僧が止まった。
「この階はちょっとヤバそうだ」
　カラ傘小僧が目の前にあるドアに耳を当てた。
「どうしたの」
「中に入るぞ」
　カラ傘小僧はそう言って、ドアをすり抜けて部屋の中に入っていった。僕とのっぺらぼうも続いて、ドアをすり抜けて部屋に入った。
　部屋はすごく広くてたくさんの人が机の前に座っている。ほとんどの人がパソコンの画面を睨みながらキーボードを叩いてる。中には渋い表情で電話している人がいる。カラ傘小僧は彼らの机の間をすり抜けて奥へと進んでいく。
　僕とのっぺらぼうもカラ傘小僧についていった。
　カラ傘小僧が一番奥にあるドアの前で立ち止まった。ドアには会議室と書いてあった。
　カラ傘小僧がドアに耳を当てた。
「やっぱりこの中だ。よし行くぞ」
　カラ傘小僧はドアをすり抜けて入って行った。
　僕とのっぺらぼうも続いてドアをすり抜けて中に入った。
「お前、いい加減、何とかしろよ。このバカが」
　五十代くらいの男性が椅子にふんぞり返り、前に立つ若い女性に向かって怒鳴っていた。
「申し訳ありません」
　若い女性が頭を下げた。長い髪の毛がバサリと前に垂れた。
「部長に営業やりたいなんて偉そうに直訴したくせにこの様かよ。女はいいよな。実力なくても色仕掛けで部長を口説けるんだからな」
「色仕掛けだなんて、そんなことしていません。営業部で活躍したい、そう部長にお願いしただけです」
「それが色仕掛けなんだよ。男が部長にそんなこと言ったところで相手にされないんだ。どうせ部長の膝に手でも置いてお願いしたんだろ」
「そんなことしていません」
　若い女性は下を向いて首を何度も横に振った。垂れた髪の毛が左右に揺れる。声は涙声になっていた。
「部長に色仕掛けを使うのはいいけどさ。それを営業でも使って成績上げてくれよ。お前の武器は色仕掛けくらいしかないんだからな」

「ひ、ひどい」
　女性は唇を噛みしめた。
「ひどいって本当のことだろ。部長に営業やりたいなんて大口たたいたくせに結果出してないんだからな。文句言うなら結果出してから言えよ」
　男性は椅子から立ち上がり、女性を睨みながら、一歩女性に近づいた。
「これから、頑張って努力します」
　女性が背筋を伸ばしてから頭を下げた。カラ傘小僧が女性の顔を覗きこんだので、僕も覗きこむと彼女は涙を浮かべていた。
「この体を使ったら、確かに営業も取れそうだよな」
　男性は女性の腰の辺りに手をやった。
「課長、やめてください」
　女性はきつい口調で言って、男性の手を払い、後退りした。
「その態度はなんだ。営業で頑張りたいなら、俺に逆らうな。これから本気でこの体を利用して営業とれや」
　男性は女性の腕を引っ張った。
「やめてください」
　女性は嫌がったが、男性は女性を引き寄せ抱きついた。
「これくらいいいだろ。お前の営業の練習だよ」
　男性は女性の体を撫で回して訳のわからないことを言っていた。
「ムカつくな。これが人間の得意技、セクハラちゅうやつやな」
　カラ傘小僧が一つしかない目の両端をつり上げた。
「やっつけますかなあー」
　のっぺらぼうの顔が真っ赤になった。
「ガオー」
　先にカラ傘小僧が姿を現した。二人の頭の上で傘を開いてグルグルと回してつむじ風を起こした。
　ビックリした男性と女性は床に尻餅をついた。カラ傘小僧は尻餅をついた男性の腹の上に一本足をのせて男性の顔を睨みつけた。
　男性は「ヒェー」と言って、後退りしながら、腹の上に乗っているカラ傘小僧を手で払った。しかし、カラ傘小僧は男性の腹の上から降りようとしない。
「お前がやってんのはセクハラだぞ。そんな悪いことする奴を俺は絶対に許さない。すぐにでも殺したい気分だ」
　カラ傘小僧は大きな口を開けて長い舌で男性の顔を舐めまわした。
「た、助けてくれ。もう二度としない」
　そこで、カラ傘小僧は男性の腹の上から離れた。男性は慌てて立ち上がり逃げようとドアの方に向かった。
　そこでのっぺらぼうがドアの前に姿を現した。
「ガオー」
　のっぺらぼうが男性に真っ赤な顔を近づけた。
「ヒェー」

男性はのっぺらぼうを見て、そこでまた尻餅をついた。
のっぺらぼうは男性の腹の上に馬乗りした。男性はのっぺらぼうを手で払おうとするが、のっぺらぼうの体は重たくてびくともしない。
「た、たすけてくれー」
男性は天井に向かって大声を出した。
「お前のやったのは、セクハラだぞおー。わしは絶対にそういうの許せないんよー。だからお前を殺したいんだあー」
「す、すまん、申し訳ない。二度としないから、頼む、助けてくれ」
男性は涙声になった。
「二度とやるなよおー。次やったら、許さんからなあー」
「二度と、二度とやりません」
そこでのっぺらぼうは男性から離れた。
「自分のストレスを弱いものにぶつけるもんじゃないぞおー」
のっぺらぼうは男性に向かってそう言った後、女性の方を見た。
女性はビックリして立ち尽くしていた。
「君はこれからも営業を頑張るんだぞおー」
のっぺらぼうが女性にそう言ってから姿を消した。
カラ傘小僧はその様子を見て、笑いながら部屋を飛び出して行った。

表と裏の顔

　三階のフロアを飛び出したカラ傘小僧は階段を使って五階まで駆け上がっていた。僕とのっぺらぼうはカラ傘小僧を追いかけて五階まで上がると、カラ傘小僧は五階の一番手前の部屋のドアをすり抜けて入って行った。僕とのっぺらぼうもそれに続いた。
　さっきの部屋より狭い部屋だ。スーツ姿の五人の男性が大きなテーブルを囲んで椅子に座っていた。
　カラ傘小僧は男性たちの顔を一人ずつ順番に覗きこみ、僕のところに戻ってきた。
「今から、こいつらはここで会議するみたいだな」
　カラ傘小僧が僕に向かって囁いた。
「会議ってなに？」
　僕は訊いた。
「まっ、人間の仕事の中でも最も時間の無駄なもんだな」
　カラ傘小僧がそう言って教えてくれたが、その意味がよくわからなかった。
「部長はまだ来ないのか」
　一人の男性がボールペンでテーブルをトントンと叩きながら言った。なんかイライラしている様子だ。
　イライラしている男性の目は一重まぶたでキツネのようにつり上がっていた。
「十分位遅れるって、さっき連絡が入ったよ。だから先にはじめてくれってさ」
　他の男性が言った。
「えー、遅れんのかよ。自分から会議やるぞって言っておいて何なんだよ。こっちは、忙しいのに無理に時間作ってやったのによお」
　キツネ目の男性の目が一段とつり上がり、持っていたボールペンをテーブルに叩きつけた。
「いつものことじゃねぇか、カッカしてもしかたないぞ」
　さっきの男性がなだめていた。
「あのバカ、ムカつくんだよな。いっつも遅れるし、会議したところで、意味もない自分の昔の自慢話ばっかり話してるしさ」
　キツネ目の男性は一段と機嫌が悪くなったようだ。他の三人はスマホをいじっていたり、腕を組んで居眠りしたりしていた。
　キツネ目の男性は他の男性を見渡してから「チェッ」と舌打ちをして「呑気なやつら」と吐き捨てるように言った。
「先にはじめてもダルいだけだし待っとくか」
　キツネ目の男性が言って、椅子の背もたれに体を預け天井を見上げた。

「そうだな」
　もう一人の男性が同意して、彼もスマホを取り出した。
　なんか変な空気が流れてるなと思った。
　しばらくすると、ドアが開いた。
　ドアが開くと同時に、「お疲れ」と言って年配の男性が入ってきた。
　男性の頭は僕の頭に似ていてツルツルに光っていた。体はのっぺらぼうに似て恰幅がよい。
「部長、お疲れさまです」
　キツネ目の男性が椅子からすっと立ち上がり、深々と頭を下げた。
「遅くなって、すまんな」
　部長は右手を上げて、ニッコリと笑った。
　他の男性も立ち上がった。床を擦る椅子の音がガタガタと部屋の中に響いた。
「お疲れさまです」
　男性全員の声が揃った。
「ああ、忙しいのに集まってもらって申し訳ないな」
　部長は言いながら椅子に腰を下ろした。
　男性全員も椅子に腰を下ろした。
　椅子を引く音がおさまるとキツネ目の男が口を開いた。
「部長お疲れさまです。今日はお忙しいのに、我々のためにお時間をとっていただき有難うございます」
　つり上がっていたキツネ目の男性の目尻はなぜか下がっていった。
「どうだ、会議は進んでいるのか」
　部長がテーブルに両肘をついて手を前で組んで訊いた。
「いえ、部長をお待ちしておりました」
　キツネ目の男性が背筋をピンと伸ばした。
「先にはじめてくれて良かったんだけどな。私なんていなくても、君たちだけで大丈夫なんだから、ハハハ」
「そんな事はありません。部長がいらっしゃらないと良い会議にはなりません」
　キツネ目の男がハエのように手を擦り合わせていた。
「この人、さっきまで話していた事と今言ってることと全然違うよね。なんでだろう？」
　僕は首を傾げながら、カラ傘小僧に訊いた。
「まあ、そうだわな。これが人間界ってもんだな」
　カラ傘小僧はニタニタと笑っていた。僕はまた意味がわからなかった。
「一つ目小僧よ、これが人間界なんだ」
　カラ傘小僧が念を押すように言った。
「どういう意味？」
　僕はもう一度訊いた。
「人間界は表と裏の顔を持ってんだなあ。それをうまく使い分けんと生きていけんわけだなあ」
　のっぺらぼうが、いつの間にか僕の頭の上であぐらをかいていた。

「表と裏の顔の意味がよくわかんないな」
　僕は首を傾げた。
「人間はいろいろ忖度しないと生きていけないんだなあ。一つ目小僧は純粋だから、ちいと難しいかもなあ」
　のっぺらぼうが僕の頭の上に乗ったまま教えてくれた。
「のっぺらぼう、いろいろと教えてくれて有難う。でも、僕の頭の上であぐらをかくのはやめてくれる。僕は君の重みで押し潰されて一段と背が低くなっちゃうよ」
「そうかい、残念だなあ。一つ目小僧の頭はツルツルしてて、気持ち良いんだけどなあ」
　のっぺらぼうは僕の頭から降りて、僕のツルツル頭を撫でながら言った。
「そうそう、一つ目小僧の頭の上はひんやりして気持ちいいし、なんか元気が出るよな」
　今度はカラ傘小僧は僕のツルツル頭をポンポンと叩いた。この二人は、いつもこんな感じだ。僕をからかって喜んでいる。でも、二人と遊んでいると僕は楽しい。今日もすごく楽しかった。
「じゃあ、そろそろ帰るか」
　カラ傘小僧がそう言って歩き始めた。
「そうだね」
　僕とのっぺらぼうもカラ傘小僧に続いて歩き始めた。
「一つ目小僧、初の人間界はどうだった？　　楽しかったか？」
　帰り道、僕の前を歩いていたカラ傘小僧が僕の方に振り返り訊いてきた。
　カラ傘小僧の傘が夕陽で赤く染まっていた。人間界の夕陽はとても綺麗だ。人間界は建物も自然もとても綺麗で教科書で見た通りだなと思った。けど、人間の心は少し印象が違った。
「君たちと遊べたのは楽しかったけど、人間界は僕の思い描いてたのとちょっと違ってたよ。人間界は僕には難しいかもしれない」
　僕は初めて見た人間に少しショックを受けていた。
「そうだろ、俺は一つ目小僧に人間界は向いていないと思ってたんだ」
　カラ傘小僧は真剣な話をする時は傘をギュッと縮める。今は傘を縮めたまま、僕の方を体を向けて後ろ向きに歩いていた。
「わしも、カラ傘小僧に同感だなあ」
　多分、のっぺらぼうも僕のことを真剣に考えてくれているんだろう。僕の隣で宙を見ていた。
「それでも人間界に行きたいのか」
　カラ傘小僧が僕の前で足を止めた。
「うん、悩んでるけど、やめた方がいいのかなと思ってる」
　僕も足を止めた。
「よーし」
　カラ傘小僧とのっぺらぼうが飛び上がってハイタッチした。
「なんで、ハイタッチなんかして二人で喜んでるんだよ。僕は人間界にちょっと幻滅して落ち込んでるっていうのにさ」
「ごめんよ、でもな、おれ達は一つ目小僧に人間界に行ってほしくなかったんだ。もし

行ってしまったら俺たちは今日みたいに三人で遊べなくなるんだからな。それに、一つ目小僧は人間界より妖怪の世界の方が合ってると思ってたんだ」
　カラ傘小僧は、今日僕を人間界につれて行ったのは、それに気付かせる為だったんだろうか。僕はそんな気がした。
「カラ傘小僧の言う通りだよ。僕には人間界は難しいよ。明日朝一番にあずき洗い先生に、この事を伝えに行ってくるよ」
「よーし、じゃあ、急いで帰ろうぜ」
　カラ傘小僧は前を向きピョンピョンと高く跳ねて走って行った。僕はカラ傘小僧を走って追いかけた。
「待ってよー」
　いつの間にか、のっぺらぼうは僕の頭の上であぐらをかいていた。重たくて走りにくいけど、今はまあいいかなと思った。

あずき洗い

次の日、僕はあずき洗い先生に人間界に行かないことを伝えるために早めに家を出た。
あずき洗い先生は、この時間いつも職員室の奥にある部屋で読書をしているはずだ。
あずき洗い先生の部屋の前に立って、僕はドアをノックした。
しばらくするとドアが開いて、ドアの隙間からあずき洗い先生が顔を覗かせた。
「先生、おはようございます」
先生に頭を下げた。
「おー、一つ目小僧くんですか、こんな早い時間にどうしたんですか」
あずき洗い先生は曲がった腰を少しだけ伸ばして、僕の顔を見上げた。
「先生に少しお話があります」
僕は背筋を伸ばした。
「そうですか。まあ入りなさいよ」
あずき洗い先生がそう言ってドアを大きく開けて部屋の中に僕を招いてくれた。
「失礼します」
部屋に入ると机の上に本が伏せて置いてあった。その本の背表紙を覗くと、『人間の煩悩』と書いてあった。
あずき洗い先生はいつも人間について学んでいる。本当にすごい先生だ。
「『人間の心得』についてわからないことでもありましたか」
「いえ、そうではありません。先生、実は人間界に行くのをやめることにしたんです」
「ほほお、どうしましたか。あれほど人間になりたがっていたのに」
「それがですね」
僕が言いかけると、あずき洗い先生が右手を出して制した。
「まあ、ゆっくり腰掛けて話しましょうよ」
あずき洗い先生はそう言って机の椅子に腰を下ろした。
「はい」
僕も先生の机の前にある椅子に腰をおろした。
「それでは、一つ目小僧くんのお話をうかがいましょうかね」
あずき洗い先生は机の上で両手を組んで僕の顔をじっと見つめた。
「実は昨日人間界に行って来たんです。勝手なことをして申し訳ありません」
僕は椅子から立ち上がり頭を下げた。
「そうですか」
あずき洗い先生はゆっくりと何度も頷いた。
「本当に申し訳ありませんでした」

「何度も謝らなくていいですよ。人間界へ行くことを特に禁止しているわけではないですからね。行ってもいいんですけど、危険な場所ですからね」
　あずき洗い先生はニコニコと柔らかい笑みを僕に向けた。
「はじめて見た人間界はどうでしたか」
　あずき洗い先生が僕の目をじっと見てきた。その瞳は湖面のように深く穏やかだった。
「昨日、人間界を見て、僕には合っていないかなと思ったんです。それで人間界に行くことはやめた方がいいかなと思いました」
「なるほど、そうでしたか」
　先生は深く頷いた。
「先生はどう思いますか」
　あずき洗い先生がどう思っているのかが気になった。
「私は良い選択だと思いますよ」
　あずき洗い先生は僕が人間界に行った事を叱ることはなくずっと笑みを浮かべ、どちらかと言うと嬉しそうだった。
「もし、あなたが妖怪の世界に残ってくれれば、妖怪の世界の宝になる方だと思っていますからね。過去に『人間の心得』をこれだけ真剣に学んでくれた生徒を私は知りません。あなたにはこれから先、私に代わって『人間の心得』を妖怪の世界に広めてもらえたらなと思っていました。そして、あなたの力で妖怪の世界をもっと住みよい世界にしてほしい。私はそう願っていましたから」
　あずき洗い先生はずっとおだやかで優しい口調だった。
「人間の心得を妖怪の世界で広める活動をしている先生を僕は尊敬しています。僕もいつか先生のようになりたいです」
「嬉しいことを言ってくれますね。でも、私はそんな大した妖怪ではありませんよ」
　あずき洗い先生は顔を少し赤くして照れた様子だった。
「先生は人間界に行ったことはあるのですか」
「人間界ですか。そうですねー」
　あずき洗い先生は、そう言って宙に視線を向けた。何か昔を思い出しているようすだった。
「行ったことがあるんですね」
　僕はもう一度訊いた。
「そうですね。まあ、行ったことがあるというより、私の場合は過去に人間界にいたと言った方がいいですかね」
「人間界にいたですか」
　僕は首を傾げた。
「実は私はもとは人間だったんですよ」
「先生は人間だったんですか」
　僕は驚いて立ち上がった。
「そんなに驚かないでください。まあ、座ってこれを見てください」
　あずき洗い先生が引き出しから何かを取り出して僕の方に滑らせた。一枚の写真だった。

　僕はそれを手に取ってから座った。写真に視線を落とす。それには坊主頭の可愛らしい一人の少年が映っていた。
「これは誰ですか」
　僕は写真から顔を上げて、あずき洗い先生に訊いた。
「それが私です。私が人間だった頃の写真です」
　僕は「えっ」と言ってから、写真に映る少年とあずき洗い先生を何度も見比べた。
「まったく似てないから、信じられませんよね」
　あずき洗い先生が苦笑いを浮かべた。
「確かに似てないですけど、本当なんですか」
　あずき洗い先生が僕に嘘をつく理由もないので、本当なんだろうとは思ったが、僕はすごくビックリした。
「嘘のような本当の話なんです」
　あずき洗い先生がニコリと笑った。
「先生が人間だったなんて、全然知らなかったです」
「誰にも話したことがないですからね」
「なぜ、人間から妖怪になってしまったんですか」
「知りたいですか」
「はい、差し支えなければ」
「あなたにならお話してもいいでしょう」
　あずき洗い先生はそう言ってから、「フゥー」と息を吐いた。
「当時、私は『日顕』という僧侶でした。そして私は住職からすごく可愛がってもらいました。それである時、住職から後を継いでほしいと頼まれたんです。それを聞いた時、私は住職に認めてもらえたと思い、すごく嬉しかった」
　あずき洗い先生は宙に視線を向けて、昔を懐かしんでいるようすだった。口元が少し綻んでいた。
「しかし、それを知った他の僧侶たちはその事をすごく妬んでいたようでした。そして彼らは私をいじめるようになりました。日に日に酷くなっていく彼らのいじめに耐えられなくなった私はカッとなってしまい、彼らと殴りあいの喧嘩をしてしまいました。さほど喧嘩の強くない私が体の大きかった三人の僧侶相手に勝てるはずもなく、私は彼らに井戸に落とされ殺されてしまったんです」
　僕は「えっ」と声が出た。
　あずき洗い先生は、過去の悲惨な話をしているにも関わらず、優しい笑みを浮かべたまま話を続けた。
「死んでしまった私は、その後今のこの姿のあずき洗いとなって、こうして妖怪の世界で暮らしているというわけです」
　あずき洗い先生は話し終えると、立ち上がり窓の外を眺めていた。
　辛い過去を思い出させてしまったと、僕は申し訳ない気持ちになった。
「先生は人間界でそんな酷い目にあってたんですか」
「まあ、私の方から喧嘩をしかけたわけですから、私も悪かったんですけどもね」
「それなのに先生は人間界を嫌いにならなかったわけですか」

「そうですね、人間界のことは嫌いにはなりませんでした。しかし、人間界は難しい世界だなと思いました」
「昨日、人間界を見てきたので、僕もなんとなくわかる気がします」
「私は人間界と妖怪の世界のどちらにも妬みや憎しみが無くなれば良いなと思っています。でも、なかなか簡単には無くならない。だから『人間の心得』のような戒めが必要なのかもしれません」
「人間界も妖怪の世界も妬みや憎しみがあるから『人間の心得』を学ぶことが必要ということですね」
「そういうことです。私は妖怪の世界にはびこる妬みや憎しみを少しでも無くそうと思って『人間の心得』をあなた方のような若い妖怪に伝授しようと取り組んでいるんです」
「先生が妖怪の世界に『人間の心得』を広めてくれているおかげで、僕はすごく勉強になりました」
「そうですか、それは良かったです。でも、本当は人間界でやるべきことだったのかもしれませんが、私には人間界は少し複雑過ぎて難しいです」
「先生はやっぱり凄いです。僕は先生を尊敬しています」
「あなたにそう言ってもらえて、すごく嬉しいです」
　それから僕は人間になることはやめて、妖怪の世界であずき洗い先生といっしょに『人間の心得』を妖怪の世界に広める活動に取り組むことにした。
　カラ傘小僧や、のっぺらぼうも僕を応援してくれた。
　それから人間界も良くしたいので、あれ以来ずっと僕とカラ傘小僧とのっぺらぼう三人で人間界に行って、イタズラを繰り返している。
　イタズラと言っても『人間の心得』が出来ていない人間を見つけては脅かして反省してもらおうとしているのだ。
　誰にでもある、ちょっとした悪魔の心、それが出てきた時に、僕たちが脅かすことで人間の本来持っている綺麗な心を引き出すようにしている。
「一つ目小僧よ、次は、あの少学校に行ってみようか」
　カラ傘小僧がピョンピョンと走っていった。
「今、あの学校でいじめが起こってるみたいだから、ちょっといじめっこを懲らしめに行くぞ」
「カラ傘小僧、ちょっと待ってよ。あまり過激な脅かし方はやめてよ。相手は子供なんだからね」
　僕は息を切らしながら、カラ傘小僧を追いかけた。
「おーい、ハァハァハァ、ちょっと待ってよ」
　頭が重くてなかなか速く走れない。カラ傘小僧との距離は開く一方だ。
「のっぺらぼう、走りづらいから、僕の頭から降りてよ。少しでも早く人間たちにも『人間の心得』を広めなければならないんだから」

人間にならなかった妖怪

著　　まつだつま

制　作　Puboo
発行所　デザインエッグ株式会社